

第1回「日本語大賞」

テーマ 「人と人をつなぐ日本語」

小学生の部 最優秀賞 受賞作品

「心に残る母の『う…ん』」

宮城県

仙台市立広瀬小学校 5年

佐藤 優里佳

心に残る母の「う…ん」

仙台市立広瀬小学校 五年

佐藤 優里佳

わたしの母は、どこも体の悪いところはなく、毎日元気に働いていました。ところが、ある日とつぜん、会社でたおれました。わたしが病院に行くと、母の意識はすでに無くなっていて、「お母さん」とよびかけても返事はありませんでした。意識がもどれば手術できるとお医者さんが言うので、家族みんなで回復を祈っていました。でも、もどる気配はありません。

わたしはねている母のそばで、

「ママは強いもん。病気にまけないもん」

と、耳もとでそつと話しかけました。すると母は、のどからしぼり出すような声で、

「う…ん」

と、返事をしてくれました。意識がないのに、声が聞こえてびっくりしました。そして次の日、母はかえらぬ人になりました。

「う…ん」は、母の最後の言葉でした。母は、きつと病気の時しゃべれなかったので、「ゆりか、ありがとう。わたしもがんばるよ。ゆりかもしつかり生きてね」という『心の声』だったのかもしれない。わたしの「ママ、まけないで」という必死の願いが届いたからだと思います。

わたしは父から言われました。

「ママと同じ病気があるかもしれない。三十才前後になったら、必ず検査をしてもらいな
やう」

そう言われたわたしは、母の分まで長く長く、一秒でも一日でも長く生きようと思いましたが、

わたしは母の写真をつくえの上においています。今だって、その写真を見ながら、「ママは、今なにしているの」

と、といかけてみると、なんだか母とお話をしているようでうきうきしてきます。母との思い出は九年間ぐらいいかないけど、わたしにとっては、十年二十年にかんじます。

わたしは母の作ってくれた手料理が大好きで、母のまねをして母の手料理を作りますが、やはり味がちがいます。でも、これからもっと勉強して同じ味にしたいです。そして、家族みんなに食べてもらいたいなと思います。

わたしは母を思い出すと、さびしくなる時があります。でもそんな時、母の「う…ん」を心に浮かべます。だって母は、ずっとわたしを見守ってくれているからです。

わたしはこれからも、母の「う…ん」をむねにしまって、母からもらった明るい笑顔でしっかり生きていきます。